

## 近世日本のダイナミズム

― 日本文明を再考する ―

文明工学研究者 草間洋一（80歳）

### 0、西欧と同時並行的に進化勃興した近世日本

反日、侮日を国是とし歴史の歪曲、捏造によってしか己のアイデンティティを見いだせない憐れな“特亜”諸国（中共、韓国、北朝鮮）は、今でも日本と日本人に対する蔑称として「小日本」「倭奴」「島夷」などと言う。戦後、反日左翼のステレオタイプな階級史観に立つ史家たちもこれに呼応するかたちで、近世日本は閉鎖的ながんじがらめの封建体制下で全人口の八割以上を占める農民たちは過酷な搾取と弾圧にあえぎ、貧困と未開の闇の中にあつたと説いてきた。

だが、彼らの無知と迷妄は嗤うしかない。近年、真面目な専門家たちの実証的な研究によつて、こうしたイデオロギーのメガネで見る近世日本像が実態と大きくかけ離れていることが明らかになってきたからだ。

本稿は、そうした研究の成果を踏まえて近世日本の実像を浮き彫りにするものである。

特亜諸国は、社会進化のダイナミズムに背を向ける儒教に呪縛され、独善的な華夷秩序に安住し、夜郎自大、井の中の蛙であり続けた。彼らが知的退廃と中世的（あるいは古代的）停滞の長い惰眠を貪っていたとき、日本（統一に向かう戦国時代の十六世紀半ば頃から江戸時代の約三百年間）は、日本固有の基層文明の伝統を踏まえながら不断の自己変革を続け、軍事大国・経済大国・教育大国・文化大国に成長したのである。

世界史はモンゴル帝国から始まると言われるように十三世紀、モンゴルの騎馬軍団はユーラシア大陸の大半を席卷し、死屍累々の荒野の上に空前絶後の世界帝国を建設した。

日本中世政治史の専門家今谷明氏に、封建制が諸悪の根源であるという俗説を見事に覆した『封建制の文明史観 近代化をもたらした歴史の遺産』（PHP新書）という著作がある。この中で、無敵に見えるモンゴル軍の侵略を断固として撃退した地域が三か所あり、一つはエジプトを本拠とするマムルーク朝スルタン、もう一つが極東の我が日本、最後に西ヨーロッパのドイツ（神聖ローマ帝国）であつたという史実を踏まえ、次のように指摘する。

「モンゴル軍に征服され尽した中央ユーラシアは、中国・ペルシアをはじめ、古くから官僚制が強かった地域であり、結果的に、後年、歴史学者のウィットフォーゲルによつて“オリエンタル・デスポティズム”（東洋的専制主義）の烙印を押された地域とほぼ重なる。これに対して、日本、西欧、エジプトは、当時封建制のさなかにあり、蒙古の騎馬軍をはね返すだけの強靱な軍力を保持していた。…また近代化（たとえば身分制議会・株式会社）の成立、産業資本主義は、蒙古征服地からは成立せず、封建制のなかから出てきたことは明らかである…」。

文化人類学者の故梅棹忠夫氏をはじめ評論家の故渡部昇一氏、思想家の西尾幹二氏らが示唆しているように、超大国というにふさわしい近世日本は、まさにユーラシア大陸の対極に位置する西ヨーロッパと同時並行的に進化勃興したのである。

## 1、世界に先駆け火縄銃の大量生産に成功した日本

日本人が初めて火薬の洗礼を受けたのは、文永十一年（一二七四）の元寇においてであった。これは「てつほう」と呼ばれ、陶製の手榴弾のようなものだった。戦局を左右するほどの威力はなかったが、慣れないうちは猛烈な炸裂音と閃光に馬は半狂乱となって制御不能に陥った。この悪夢のような「てつほう」体験から約二七十年後、日本人は武器としての火薬の威力に改めて瞠目することになる。

天文十二年（一五四三）、種子島に漂着した明国のジャンクに同乗していたポルトガル人が火縄銃をもっており、その試射を見た若き領主種子島時堯は驚嘆し大金をもって二丁購入、領内の鍛冶師に複製を命じ、家臣に火薬の製法を学ばせ、ほぼ一年後に国産火縄銃「種子島銃」が完成した。この製法は、紀伊の根来、泉州の堺、近江の国友村に伝わりそれぞれ鉄砲生産の主要拠点となった。

中でも当時の堺は、四十人近い豪商・会合衆が治める自治都市で、一五七〇年織田信長に屈服するまで環濠で囲まれた町は傭兵を雇って自衛し、日明貿易（勘合貿易）、琉球貿易、南蛮貿易の拠点として栄えた一大国際貿易都市であった。織田信長、豊臣秀吉にも謁見したイエズス会宣教師ルイス・フロイスは、その著『日本史』の中で当時の堺の繁栄ぶりを“東洋のベニス”と記している（『完訳フロイス日本史』1 将軍義輝の最期および自由都市堺―織田信長篇1 松田毅一・川崎桃太訳、中公文庫）。

古代から続きたたら製鉄の優れた製鉄技術、世界一の切れ味を誇る日本刀造りの鍛造技術に加えて、堺では、銃身、銃床、からくり、ネジなどの部品を規格統一化し（部品互換性）流れ作業的な組み立て方式で世界に先駆けて火縄銃の大量生産に成功した。当時、海外では一丁ずつ一人の職人が全工程を手作りしていた。しかも、日本の職人たちはただコピーするだけでなく不断に改良を重ねて威力を高めたり「雨覆い」を考案開発した。

国産火縄銃の優秀性について、アメリカの歴史学者アルフレッド・W・クロスビーは『飛び道具の人類史 火を投げるサルが宇宙を飛ぶまで』（小沢千重子訳、紀伊國屋書店）の中で「日本の火縄銃はヨーロッパのそれに比べて、口径が大きく、引き金装置の信頼性が高かった。さらに、雨で火縄が濡れることを防ぐとともに、闇の中で火縄が赤くくすぶるのを敵の目から隠すための小さな覆いがついていた」と記している。

ときはまさに戦国時代、日本中の武将や荘園領主や土豪たちはこの新兵器を競って導入した。前記三拠点だけでなく、各地の刀匠や鍛冶職人も火縄銃の製造に競って取り組んだ。

鉄砲が伝来してから二十年も経たない一五五〇年代に日本国内には三〇万丁以上、十六世紀末には五〇万丁以上の国産火縄銃が存在したといわれている。この数は全ヨーロッパの銃の総数を大きく上回るものだった。優秀な国産火縄銃は南蛮貿易で本場のヨーロッパにも輸出された。

火縄銃は、中世的アンシャンレージュを打ち破り、近代につながる新たな時代の扉を開く鍵の役割を果たすのである。

## 2、戦争革命を主導した織田信長

新鋭兵器鉄砲の大量導入と一斉射撃などの効率的な運用によって、日本における戦争革命を主導したのは、天下布武の旗印を掲げた織田信長であった。

広く知られているように天正三年（一五七五）、長篠・設楽原の戦いで大量の鉄砲を組織的に運用した織田信長指揮の織田徳川連合軍は、当時無敵と恐れられていた武田勝頼の騎馬隊を殲滅した。三千丁の鉄砲を三組に分けて間断なく射撃する「三段撃ち」は近年疑問視されているが、空堀と馬防柵とを巧みに利用しながら大量の鉄砲を効率的に使ったことは確かである。武田方も数百丁の鉄砲は用意していたのだが、その運用よりもまず騎馬武者が敵の前線を突破する従来型の野戦方式をとったため、待ち構えていた織田徳川軍団の鉄砲隊の餌食になり名だたる武将たちも数多く討ち取られ惨敗を喫したのだ。

織田信長の圧勝は、大量の鉄砲の巧みな運用に加えてその圧倒的な兵力差によるものだった。武田軍は総勢一万五千人ほどであったのに対し、織田方は二倍以上の三万八千人ほどであったと専門家は推定している。

ちなみに、この長篠・設楽原合戦の原型のような戦いが半世紀前にハンガリーの南部、ドナウ川右岸に広がるモハーチ平原で行われていた。いわゆるモハーチの戦いである。

当時、アジア、アフリカ、ヨーロッパにまたがる大帝國を築いていた軍事先進国オスマン・トルコ帝國のスレイマン一世は、一五二六年、ヨーロッパでの版圖拡大のため首都イスタンブールから六万ほどの大軍を率いてモハーチに侵攻した。この中には火繩銃を使いこなす約一万の精強な皇帝直屬の親衛隊イエニチェリ軍団とおよそ三〇〇門の大砲が含まれていた。オスマン軍は、大砲を並べ、大砲と大砲の間を鉄の鎖で結んで馬防柵とし、大砲の後方に銃撃隊を配置し、先込め単発銃の火繩銃を三段撃ちならぬ「二段撃ち」態勢で陣を構えた。対するハンガリー王国軍は、若き国王ラヨシュ二世に率いられた三万近い騎馬軍団と姻戚関係のハプスブルク家やトランシルヴァニア、ボヘミヤの援軍を加えてオスマン軍とほぼ同数の軍勢であった。

ところが、血気にはやるラヨシュ二世は、援軍との連携をとることなく侵略者の陣に向かって騎馬軍団を率いて突撃を敢行した。結果は無残なものだった。ハンガリー軍は国王をはじめ約二万の犠牲を出して大敗を喫した。オスマン帝國軍の犠牲はその十分の一に過ぎなかった。火器の組織的運用、大砲の一斉砲撃のあとに続く火繩銃の「二段撃ち」に、西欧最強の騎馬軍団が壊滅したのだ。この戦いは近世軍事史上の一大画期となった。

モハーチの戦いに勝利したオスマン帝國軍はハンガリーの首都ブダに進駐し、その三年後、神聖ローマ帝國の帝都ウィーンを包圍（第一次ウィーン包圍）し、ヨーロッパ中のキリスト教徒を震撼させた。

要は、スケールは違うがモハーチの戦いと長篠・設楽原の戦いが瓜二つであるということだ。仏教教団勢力への牽制と南蛮の文物への関心からバテレンを歓迎した信長が、彼らに彼の地の戦争の仕方について問い、「モハーチの戦い」を聞いていたのかもしれない。

もともと、そうした情報はなくても、天才的な信長なら自らの頭脳で効率的な火器の運用法を編み出すことは容易であつたらう。

信長は軍略に長けていただけではない。戦争革命を支えたものは、兵農分離（信長の統

一事業を継いだ豊臣秀吉によってほぼ完成）による常備軍の設置、槍隊、弓隊、鉄砲隊など兵種による大規模部隊の編成、出自や門地に関係なく実力主義による人材登用、火器に対応する堅牢な城の建設、関所の撤廃、中世的な特権的商権「座」を廃止し「楽市楽座」による物流の活性化など、目を見張るような改革であった。

また、信長は宗教教団が領主的な政治権力を持つことを認めなかった。相手が権威ある比叡山延暦寺であれ大勢力の石山本願寺であれ容赦しなかった。信教の自由は認めたくえで近代的な政教分離思想を先取りしたのである。比叡山の焼き討ちや一向宗の長島一揆勢の虐殺など日本人離れした残酷性も示したが、その肯定的側面としてはヨーロッパにおけるユグノー戦争や三十年戦争のような同胞相食む悲惨な宗教戦争を未然に防いだことである。江戸初期の三代将軍家光の時代に勃発した島原の乱は、苛斂誅求の圧政に苦しむ地域住民の大規模な反乱蜂起であり、キリシタンの旗印は雑多な人々を統合するためのイデオロギーに過ぎず、宗教戦争とは言い難い。

信長は新しい時代を切り拓くまさに天才であったが、残念ながら天下統一の完成を見ずに家臣明智光秀の謀反によって本能寺で横死したのだった。弔い合戦で光秀を倒し、ライバルの柴田勝家との戦いに勝利して主君信長の志を継いで統一事業を成し遂げた豊臣秀吉は、朝廷の権威のもと関白、太政大臣となり、太閤検地、刀狩り令を発し、完全に天下を統一し、近世（近代）統一国家の基礎を築いた。

### 3、軍事超大国であった日本

ところで、十六世紀末当時の日本の軍事力はどうかであったか。ちなみに、天正十五年（一五八七）、豊臣秀吉による九州平定戦に動員された総兵力は約二二万、その三年後の小田原攻めでは陸兵約二二万に加えて九鬼・毛利の水軍約四万であった。日本統一後の動員可能な総兵力は五〇〇六〇万、明やオスマン帝国と並ぶ軍事超大国であった。

モンゴル支配の元帝国を倒し漢民族が主役となった明帝国は、十五世紀初頭の永楽帝の時代に最盛期を迎えた。モンゴル高原に遠征し元の残存勢力であるタタル部やオイラート部を制圧して万里の長城を構築、安南・李氏朝鮮・ビルマを完全属国化する一方、七回にわたる鄭和の大艦隊の遠征で南海をはじめインド洋、アラビア海、紅海に及ぶ広域に明帝国の武威を示した。当時の総兵力は陸兵だけで二〇〇万を超え、文字どおりの軍事超大国であった。だが十六世紀末になると、皇帝が無能のため宦官が実権を握って派閥抗争を繰り返して政治は混迷を深め、加えて北虜南倭（北方遊牧民族の侵入と南・東シナ海沿岸での倭寇の侵攻略奪）で国力は衰退し、実働可能兵力は当時の日本とほぼ同規模かそれ以下となっていた。

信長同様、シナ中心の華夷秩序などはなから認めていない秀吉は、日本国内の統一後は世界の覇者にならんとまず明の征服を企図、九州を平定した天正十五年、朝鮮国王に入貢を要求する。元寇の逆バージョンで、李氏朝鮮を大陸侵攻の先導役にしようとしたのだが拒否され、朝鮮出兵となった。なお、朝鮮出兵の前年、秀吉はインド副王（ポルトガル総督）、スペイン国王、フィリピン諸島にも服属を迫っている。

二回にわたる朝鮮出兵、文禄（一五九二）・慶長（一五九七）の役に動員した兵力は、前者が西国衆を中心に約二〇万、後者が約一四万であったが、本陣の名護屋には東国衆と秀

吉旗本衆が一〇万以上待機していた。

朝鮮には日本軍の侵攻当初、鉄砲はなく武器は雑多で劣悪なうえ士気も低かった。遠征軍の鉄砲配備率は二〜三割で、向かう所敵なくあつという間に首都を制圧、王は住民に石を投げられながらわずかな供を連れ命からがら遁走する。明との国境に先鋒隊が到達すると、ようやく明の援軍が反撃し快進撃はとまるが、明兵の火繩銃は日本のものより射程が短く威力も弱かった。また、明兵の刀剣は日本刀より短く、白兵戦でも日本軍が圧倒した。

明軍だけでなく朝鮮人のゲリラが蠢動し、加えて朝鮮水軍の決死の反撃で武器弾薬や兵糧の補給が思うにまかせない局面もあったが、日本遠征軍の優位は揺るがなかった。

秀吉の死で総撤退となったが、もし秀吉があと五、六年元気でいたら世界地図が現在と大きく変わっていた可能性はあるだろう。

ちなみに、十六世紀末時点における推定人口は、日本二、二〇〇万人、明一億五、〇〇〇万人、李氏朝鮮五〇〇万人、イスパニア・ポルトガル王国（フェリペ二世が両国の王）一、〇〇〇万人、オランダ一五〇万人、イングランド王国六〇〇万人であった。

昔日の面影を失い衰退に向かう明と対照的に、統一された近世日本は国力が充実し世界有数の軍事超大国であった。確かに、秀吉軍の侵攻に加えて弛緩した軍紀の明軍を招き入れた朝鮮は荒廃し、属国への援軍を差し向けた明も軍費の負担で国家財政は逼迫し、後金（清）の侵入と相まって滅亡を早めた。

#### 4、秀吉の明征服構想は“第二の元寇”を未然に防ぐためでもあった

豊臣秀吉の明征服の企図は単なる征服欲・支配欲からではないという説もある。この興味あるテーマにスポットを当てたのは評論家入江隆則氏の「秀吉はなぜ朝鮮に出兵したか」（西尾幹二責任編集『地球日本史1』扶桑社）と題する論文である。

十五世紀の初めから十六世紀末にいたる東アジア最大の歴史的出来事は、鄭和のインド洋大遠征と秀吉の朝鮮出兵であったが、秀吉の破天荒な行動を突き動かした世界認識はスペインやポルトガルの宣教師たちの中国征服構想に影響されたものだという。

入江氏は本論考の中で、歴史学者高瀬弘一郎氏の『キリシタン時代の研究』に収められている「キリシタン宣教師の軍事行動」を詳しく紹介している。

これによれば、中国をキリスト教国にするためには武力を使うのをためらうな、と宣教師たちは繰り返し何度も本国にこの提言を送っており、また中国征服は、スペインが中南米で征服したアステカ王国やインカ帝国と同様に容易だと繰り返し返している。秀吉も明征服は簡単だと考えていたが、これは多分にスペイン・ポルトガル情報によるものらしい。

高瀬氏はローマのイエズス会文書館などの資料に基づいて論文を書いているのだが、中国征服を提言している宣教師のなかには秀吉をよく知る日本布教長や巡察師たちもいた。

日本の武力征服に関しては、日本は武勇の国だから征服は困難であると同時に、征服しても中国ほどの利益にはならない、というのが彼らの一般的な考えだった。彼らは、中国の武力征服に当たっては日本と同盟するのが有利だとして、秀吉が日本を統一した後で中国を征服する際には、ポルトガル船（この時期スペイン王がポルトガル王も兼ねていた）を提供して支援すべきだとも書かれていた。

一五八七年の六月、九州平定戦で博多に滞在していた秀吉は、イエズス会の日本準管区

長コエリヨを引見した。秀吉はこの二年前にも大阪城でコエリヨに会い、大型船二隻を船員付きで売却してほしいと頼んでいた。この頃、マニラではスペインによる中国への出兵計画が煮詰まりつつあり、平戸の松浦隆信や小西行長らのキリシタン大名はマニラの総督府に対し、シヤムにでも明にでも兵を送ると申し出ていた。

コエリヨは秀吉の依頼に従うふりをして、外洋航海には役に立たないフスタ船（当時の小型南蛮船で一本または二本マストに三角帆を張り、櫂を備えた吃水の浅い船）に重装備を施して、その威力を誇示するかのようにして博多滞在中の秀吉の前に現れた。この常軌を逸した振る舞いに高山右近や小西行長らはキリスト教会全体に災難が降りかかるのを恐れ、そのフスタ船を秀吉に贈れと勧めたがコエリヨは拒否した。秀吉は激怒し、この直後にキリシタン禁止令を出している。

別の資料によれば、このフスタ船の櫂の漕手が鎖で繋がれた日本人奴隷たちであることを秀吉は見過ごすことができなかったのだという。これだけでなく、九州のキリシタン大名たちの領内では神社や寺院を打ち壊し、宣教師たちの教会を建てたり、火薬の主原料となる硝石を入手するため、硝石一樽当たり日本人女性五十人の奴隷と交換するなどの商談を仲介した宣教師たちの実態を秀吉は知ったのだった。キリシタン大名たちは領地の一部を南蛮宣教師たちに寄進していたが、その“租界”内のセミナリオなどには密かに武器弾薬が貯蔵されていることも秀吉は現地に来て知ったのである。

宣教師たちの許しがたい裏の顔を直接垣間見た秀吉がキリシタン禁止令を発したのは、日本の統治者として当然の措置であった。ともあれ、ここにスペインと同盟して明を征服する案は破綻し、外洋船の調達が絶たれた秀吉は陸路、朝鮮を経由して明に侵攻する方法を選ばざるを得なかった。また秀吉は、明が西欧に支配されれば、将来それは必ず元寇以上の日本への脅威になると予測した。そうであるなら、スペインに攻略される前に独力でシナを支配下に置こうと考えたのが朝鮮出兵の動機であったのではないかという。

入江隆則氏は、これが真相であるなら秀吉は当時すでに近代国家日本の朝鮮経営や満州経営に近いアジア戦略を持っていたことになる、と評価している。

そもそも、日本・スペインの同盟を巡っては互いに同床異夢であった。秀吉はシナを支配し、同盟の代償としてスペインにシナでのキリシタン布教の自由を与えるだけで十分だと考えていた。一方、スペイン側は日本兵はシヤムにおける傭兵のようなものとしか考えていなかった。それ故、もし同盟が成ったとしても早晚同盟は破綻し、両者は干戈を交えることになっただろう。幸か不幸か東西両雄のフェリペ二世と秀吉は、一五九八年九月、申し合わせたように相次いで亡くなり、両者の対決は起きなかった。

## 5、近世日本は経済超大国

日本は金銀の産出国として戦国時代以降世界的に突出していた。例えば、ユネスコ世界遺産に登録された島根県の石見銀山は、十六世紀後半から十七世紀初頭の最盛期にはここだけで全世界の三分の一の銀産出量を誇っていた。石見銀山だけではない。信長・秀吉・家康と代々の覇者たちの直轄であった兵庫の生野銀山は、明治維新後は新政府の直営となり殖産興業の日本近代化を支えた。

金も戦国時代から、越後金山、佐渡金山、伊豆金山、甲斐金山などが有名で、かなりの

量を産出した。金銀鉱山は、その他日本各地に数多く存在した。

経済史家の故角山榮氏は、『日本史の中の世界一』（田中英道責任編集 育鵬社）の中で、アダム・スミスが『諸国民の富』（『国富論』・一七七六）を著し、国富＝生産力説が経済学の主流を形成するが、それまでは重金主義思想およびそれと関連する重商主義思想が支配的地位を占めており、この重金主義思想によれば、十六世紀における世界の経済大国はスペインと日本であったという。ところで、国内で銀を算出しないスペインがどうして大量の銀を保有し、「日の没することなき大国」と称されるようになったのか。

コロンブスがアメリカ大陸を“発見”（一四九二）した後、スペインは新大陸を南下し、探検・領土化を進めていく過程でメキシコ銀を発見し、ついで南米ではインカ帝国を亡ぼして（一五三三）大量の銀を収奪することによって経済大国を築いたのである。そうしたなかで、一五四五年に発見したのが埋蔵量世界一と称されたポトシ銀山であった。

ポトシ銀山は、現ボリビア、アンデス山脈の海拔約四千メートルの盆地にあり、人の住む都市としては世界最高地点にある。富士山頂より高いここは、酸素が希薄な乾燥地帯で、まともに草も生えない不毛の地である。現在も観光用に細々と手掘りが行われているが、スペイン統治時代に産出した銀は、合計四万五千トンにも上るといふ。

しかし、ここはこの世の地獄、忌まわしい“人を食う山”と呼ばれていた。残忍な征服者のスペイン人たちは、征服したインディオたちを奴隷として強制労働を強い、まともな食料も与えず、不衛生で危険な暗い坑内で死ぬまで酷使し、インディオ人口が激減するとアフリカから輸入した黒人奴隷たちを投入した。なんと八〇〇万人もの命がこの山に“食われ”たのだ。やせ細ったインディオや黒人奴隷たちは無慈悲な剣と鞭のもとココアの葉を噛みながら、恐怖と闘い、空腹と疲労と眠気に耐えてノミをふるい、掘り出した鉱石を細い坑道から運び出した。こうした作業の繰り返しうちに栄養失調、有毒ガス、粉塵、高山病、過労、落盤事故などで次々と死んでいったのだ。

スペインの征服者たちによるインディオに対する言語に絶する極悪非道な所業の実態は、一五四二年に司祭のラス・カサスが著した『インディアスの破壊についての簡潔な報告』（染田秀藤訳・岩波文庫）に記されている。インディオたちを犬の餌として連行したり、無抵抗の者を面白半分に切り刻んだり、生きたまま火炙りにしたり、妊婦の腹を切り裂いて胎児を取り出したり；、読み進むことが耐え難くなるほどだ。ここにはキリスト教と文明の名のもとに馬を駆って新大陸に乗り込んだ征服者＝スペイン人たちの、温和な原住民に対する収奪と理不尽な殺戮の実態が赤裸々に刻まれている。

十一世紀末から始まった十字軍の“遠征”にしてもそうだが、神に選ばれた者であるから異教徒に対しては何をしても許されると思い込んでいる白人キリスト教徒ほど野蛮で残忍なホモ・サピエンスはいない。彼らはまさに“白い野蛮人”である。

ところで、十六、十七世紀、日本の莫大な富（＝銀）は生糸や絹織物などの購入代金として大半は南蛮貿易で海外に流出したが、なお国内には大量の銀が蓄積されていた。この蓄積された大量の銀こそ、“自律と円熟”の江戸文化、江戸文明を生み出したのである。

この辺りの事情を故角山榮氏は前掲書の中で次のように概観している。

「信長、秀吉から発した城下町建設プランを引き継いだ徳川幕府は、その巨大な富を日本列島改造の大公共事業に投資した。幕府・大名だけでなく、商人や地主の民間投資も動員することによって、行政百万都市・江戸、商人水郷都市・大阪の二大都市建設、東は日光

東照宮、西は京の二条城のほか、全国各地に特色ある城下町建設、道路網の整備、灌漑、水運のための用水路、運河の建設、新田開発、河川の付替え、治水工事など、主要な事業は十七世紀末までにほぼ完成した。しかし同時に銀産出も底をつくことにより、世界一の経済大国・日本の好景気も終わった。その開発ブームの過程で江戸、大阪を中心に、現代にも生きる都市庶民文化がいかに繁栄したかは忘れることはできない。これらはすべて十六、十七世紀に栄えた世界一の経済大国・日本の遺産である。」

十八世紀初頭、江戸は人口百万を超える世界一の大都市であった。北京、パリ、ロンドン、大阪などがこれに続いた。世界に先駆けて産業革命を成し遂げたイギリスでは都市への人口流入が進み、ロンドンが江戸を超える人口を擁するようになるが、それは十九世に入ってからである。

## 6、左翼史家の貧農史観は的外れ

江戸時代は「土農工商」の身分制度が固定化された封建社会で、農民は武士階級に次いで上位に位置づけられていたが、その実態は五公五民、六公四民などの苛斂誅求に苦しめられ、自分でつくる米も満足に食べられず粟や稗などの雑穀を常食にしていた。一戦後長い間、マルクス信仰の左翼歴史家たちが描いてみせたこうしたステレオタイプな江戸時代の農民像は、近年の実証的な研究によって否定されている。

まず、「土農工商」という言葉は江戸時代に存在せず、インドのカースト制度やイギリスなどにおける階級制度と異なり、基本的には職業による身分の区分で血統によるものではなく、大名・高家など一部の高級士族を除いて土農工商は平等であった。江戸時代の実態的な身分制度は武士、百姓、町人の三つの身分区分であった。百姓は村に住む者を指し、農業従事者だけでなく、鍛冶屋や大工、木工職人、海運業者や漁業従事者なども含んでいた。町人は城下町に住む武士以外のさまざまな職業従事者を指している。同じ鍛冶屋でも城下町のそれは町人となる。そして、この三身分相互間の移動はかなり自由であった。

例えば、三井財閥の祖は武士をやめて商人に転じたものだ。慶長年間、三井財閥の先祖に当たる三井高俊が武士を廃業して伊勢松坂の地で質屋や酒屋を開業したことに始まる。また、勝海舟は、激動の明治維新において江戸に迫る官軍の総帥西郷隆盛との談判で江戸城無血開城を果たして江戸を戦火から守ると同時に、主家・徳川家の名譽ある存続をもたらしたが、彼の曾祖父は越後の貧農出身の盲人である。彼は江戸に出てきて幕府公認の高利貸しとなって莫大な富を築き、検校（盲人の最高位）の位を買官し、また御家人株を買って子孫を幕臣にしたのである。

左翼の歴史家や言論人は、歴史のファクトを見ずに教条的な史観のメガネで時代を見るのが常である。彼らは江戸時代の農民も帝政ロシアの農奴と同じと決めつけてきた。戦前戦中を軍部支配の暗黒時代視するのと同じように“貧農史観”に固執してきた。

だが、実態は大きく異なるようだ。農学博士の佐藤常雄氏はさまざまな実証的データをもとに貧農史観に疑問を呈している。

江戸時代の年貢はすべてムラ単位で上納される年貢村請制であるが、土地台帳のもとになつている検地は、一部の例外を除いて幕領・藩領のほとんどは十七世紀後半に終了しており、およそ二百年間不変の数値となっていた。この間、農業技術の進歩による土地生産

性の向上、二毛作など作付け方式の高度化、田畑利用率の上昇、米より収益性の高い綿・菜種・藍・紅花など商品作物の導入、酒・味噌などのような付加価値を高める農産加工業の進展、出稼ぎや日雇い、商売による賃金収入の増加など、活発な農民の経済活動の成果は、十七世紀後半の検地帳に反映されることはなかったのである。

その結果、幕末期に近づくにつれて、実際の年貢率は二割あるいは一割という低率となるムラも少なくなかった（佐藤常雄「貧農史観への疑問」『地球日本史2』に収録）。

江戸時代の農業の生産性を飛躍的に高めたものに「農書」の存在があった。佐藤常雄氏によれば、農業技術を中心に記録された農書は、十七世紀後半の元禄時代から十八世紀前半の享保期にかけて集中的に登場し、その成立は日本列島の地域差を超えて分布、北は陸奥国から南は琉球にいたるまで全国各地で確認できるという。

もし、江戸時代の農民たちが貧苦にあえいでいたのなら、お伊勢詣でや四国八十八か所巡礼や富士詣でなどが全国的なブームになることなど考えられない。

では、当時の農民など一般庶民は外国人の目にどのようなように映っていたのであろうか。日本の近代海軍育成の恩師といえるオランダの海軍軍人カッテンディーケは、安政四年（一八五七）九月、幕府が発注した軍艦・咸臨丸を長崎に回航した後、長崎海軍伝習所の第二次教官となり、勝海舟や榎本武揚などの幕臣に航海術、砲術、測量術などを教えた。彼の長崎滞在は安政四年から六年にわたり、その間、鹿児島、対馬、平戸、下関、福岡の各地を訪れている。回想録『長崎海軍伝習所の日々』の中で、庶民の姿を次のように描いている。「この国が幸福であることは、一般に見受けられる繁栄が何よりの証拠である。百姓も日雇い労働者も、皆十分な衣装を纏い、下層民の食物とても、少なくとも長崎では申し分のないものを摂っている。：日本の下層階級は、私の看るところ、むしろ世界のいずれの国のものよりも大きな個人的自由を享受している。そうして彼らの権利は驚くばかり尊重されている。：上層民の武士階級は格式と習慣の“奴隷”となっているが、これに反して、町人は個人的自由を享有している。しかもその自由たるや、ヨーロッパの国々でもあまりその比を見ないほどの自由である。：法規は厳しいが、裁きは公平で、法規と習慣さえ尊重すれば、決して危険はない」（渡辺京二『逝きし世の面影』平凡社ライブラリー）。

## 7、近世日本は世界に誇る文化大国でもあった

長崎の出島など世界に向かって四つの窓が開かれていたとはいえ、民間レベルでの自由な海外交流や貿易が禁じられていた江戸時代、日本独自の文化や科学技術、信用経済システムなどが花開いた。それらはいずれも高度なもので、中には同時代の世界レベルを超えるものも数多くあった。

いまや日本を代表する大衆芸能として世界中に知られている歌舞伎は、江戸時代初期、京都・鴨川の四条河原で出雲阿国が演じたかぶき踊りがルーツであるが、町人階級の圧倒的な支持を得て発展してきた。歌舞伎熱は農村にも波及し、江戸中期から幕末にかけて各地に農村歌舞伎が生まれた。鎮守の森や街道筋の近くに常設小屋が作られ、農民たちは農閑期に練習し、年数回のハレの日に農民自らがそれぞれの役を演じて楽しんだ。

十七世紀半ば、五代将軍徳川綱吉の文治政治によって、産業が発達し、豊かになった町人たちを基盤に元禄文化が花開いた。この時代、経済力をつけた大阪や京都の上方町人が

新たな文化を生み出した。その代表格が井原西鶴と近松門左衛門である。彼らは浮世草子や歌舞伎や人形浄瑠璃作家として多くの名作を世に送り出した。

一方、江戸では松尾芭蕉が連歌の発句から俳諧（俳句）を完成させ、後に「俳聖」と謳われた。この世界最小の定型詩は第二次大戦後、世界中で再評価され、各国語でハイクが作られるようになった。元ウクライナ大使の馬淵睦夫氏によれば、親日国のウクライナでは中学課程の教科書に松尾芭蕉と俳句について数十頁にもわたって紹介されているという。

後にフランスの印象派に大きな影響を与えた浮世絵もこの時代に確立された。

自然科学分野でも世界に誇れる成果が多岐にわたって見られる。「算聖」と謳われた関孝和に代表される和算もその一つである。彼は、独力で代数学を構築し、西洋数学の大家ライプニッツに先駆けて行列式の理論を提示するなど高等数学を大成した。

農学のバイブルといわれる『農業全書』を著し、「農聖」と謳われた宮崎安貞も元禄期に活躍した人である。医学においても十九世紀のはじめ、外科医の華岡青洲が欧米に半世紀近く先駆けて世界初の全身麻酔手術に成功した。

華岡青洲と同時期、大変な苦勞の末初めて精緻な日本地図を制作した伊能忠敬の名も挙げねばならない。十八世紀の後半になると、英・米・露の艦船が日本近海に来航、とりわけロシア船が執拗に蝦夷地周辺に出没したため海防問題が幕府の喫緊の課題となった。和算、暦学、天文学を学んだ伊能は、地球の子午線上の一度の長さを実測し、地球の大きさを知りたいという夢を抱いていた。そんな伊能に幕府から蝦夷地の測量が依頼された。彼は箱館を起点として東南海岸に沿って測量を開始した。さまざまな機器で角度や距離を測る導線法という測量術を使った。平地では量程車を転がし、複雑な地形では縄を用いて距離を測った。彼が測量のために歩いた距離は地球を一周するほどのもので、子午線一度の長さを正確に算出した。伊能の実測値をもとに幕府の暦局によって「大日本沿海輿地全図」別名「伊能図」が完成したのは彼の死後であったが、その正確さは幕末に來日した西洋の専門家を驚かせ、この地図を巡ってシーボルト事件（海外持ち出し厳禁の伊能図を持ち出すとして）も起きた。

この伊能図について、杉原誠四郎ほかの『新装 新しい歴史教科書』（自由社）は次のように評価している。「伊能図は、和算の水準の高さ、科学をきわめようとする実証精神、困難にめげない不屈の魂の記念碑である」と。

幕末から明治にかけて活躍した「からくり儀右衛門」こと田中久重は、「東洋のエジソン」と謳われた天才発明家であった。彼は日本で最初の民間機械工場、芝浦製作所（東芝の重電部門の前身）の創業者でもある。青年時代、水圧、重力、空気圧などの力を利用したからくり人形を製作、中でも「弓曳童子」「文字書き人形」「童子盃台」などは傑作である。その後、西洋時計に興味をもち、西洋の天文暦学や数学を学び、仏教の宇宙観を表す天体時計「須弥山儀」や一度巻けば一年間動き続ける脅威の時計「万年自鳴鐘」を完成させた。ペリー来航後、国防技術に関心をいだき蒸気船の模型の製造、反射炉やアームストロング砲の開発製造にも着手した。彼はまさに、技術大国日本の礎をつくった天才機械技術者であった。

また、十八世紀の初めには、江戸は人口百万を超える世界最大の都市となる一方、米をはじめ醤油、酒、木綿など全国各地のさまざまな物産の集散地となった大阪は“天下の台所”として栄えた。大阪に蔵屋敷を置いた各藩は、年貢米や特産品の売却を商人に委託し

た。大阪に集まった物産は菱垣廻船や樽廻船によって江戸に運ばれた。

享保十五年（一七三〇）、大阪に堂島米会所が開設され、米は所有権を示す米切手で売買されることになった。取引には、現物取引の「正米取引」と先物取引の「帳合米取引」の二通りあった。後者は敷銀という証拠金をつむだけで、差金決算による先物取引が可能であった。堂島米会所は世界初の先物取引市場であった。金融派生商品、デリバティブはここで生まれたのである。

## 8、識字率と民度、道徳性の高さは世界最高

ハインリッヒ・シュリーマンは、年来の夢であったトロイアの遺跡発掘を実現する六年前の慶応元年（一八六五）、世界漫遊の旅で日本にも立ち寄った。幕府の護衛に守られて横浜、江戸、八王子とその周辺が見学範囲であったが、のちに旅行記の中で次のように日本の教育レベルの高さに驚いている。「教育はヨーロッパの文明国家以上に行き渡っている。シナを含めてアジアの他の国では女たちが完全な無知のなかに放置されているのに対して、日本では、男も女もみな仮名と漢字で読み書きができる」（『シュリーマン旅行記 清国・日本』石井和子訳、講談社学術文庫）と。

この時点よりさらに三百年以上も昔の十六世紀半ば、初めて日本上陸を果たした“南蛮人”の宣教師フランシスコ・ザビエルも日本人の民度の高さについて書簡の中で次のように記述している。「この国の人びとは今までに見見された国民の中で最高であり、日本人より優れている人びとは、異教徒のあいだでは見つけられないでしょう。彼らは親しみやすく、一般に善良で悪意がありません。驚くほど名譽心の強い人びとで、他の何ものよりも名譽を重んじます」（『聖フランシスコ・ザビエル全書簡3』河野純徳訳、平凡社）。

管子に「倉廩実ちて則ち礼節を知り、衣食足りて則ち榮辱を知る」とあるように、一般的に、民度や道徳性は安定した暮らしと教育によって支えられている。

ザビエルが接した日本人は、全員が当時の上流階級であったわけではない。従って室町時代においても日本人の民度、真の意味での教養の高さが偲ばれる。各種の証言などから、日本はこの時代から世界一の教育大国であったようだ。

江戸二六〇年の「徳川の平和」の時代、武士たちは文武両道に秀でたリーダーであり、かつ有能な行政マンであることが求められ、武士階級の識字率はほぼ一〇〇パーセントであった。武士の子弟が学んだ藩校は全国で二八〇余あり、多くの逸材を輩出した。藩校はいわば公立であるが、国立にあたる幕府直轄の教育・研究機関は神田湯島にあった昌平坂学問所である。これは東京大学、筑波大学、お茶の水女子大学の源流となった。

藩校とは別に各分野の個性豊かな私塾が各地に開かれた。漢学塾、心学塾、国学塾、東洋医学塾、西洋医学塾、蘭学塾、和算塾、天文学塾、書道塾、画塾などである。こうした私塾は幕末には全国でおよそ一千五〇〇あり、その設立者・教師・塾生に身分や階級の制約はまったくなかった。これらの私塾を設立した人物や塾生のなから明治維新を推進し、新たに生まれた明治という統一国民国家のリーダーとなった人材が数多く排出した。

一方、町人や農民など庶民の子弟は近所の寺小屋で実学を中心に学んだ。前出『新版新しい歴史教科書』では「寺小屋の教育」について次のように解説している。

「寺小屋では、読み・書き・算術に加えて、教訓、社会、地理、歴史、礼儀作法、実業な

どを教えた。女子には裁縫や活け花も教えた。寺小屋は、徳の育成を重んじた。孝行、正直、心のもち方の大切さを教え、敬語と言葉づかい、勉強のときの姿勢や、食事のとり方などの礼儀作法をしつけることに力が注がれた。教科書は往来物とよばれ、七〇〇〇種類以上が今日でも残っている。寺小屋の教師は手習師匠とよばれた。全国の師匠の三人に一人が、女性だった。師匠は、全身全霊を傾けて教えた。」

江戸時代の庶民教育の場であった寺小屋は、寺や自宅を開放して僧侶や浪人らが教師役となり、全国で一五五〇〇軒以上あった。江戸や大阪の大きな寺小屋には、五〇〇人から六〇〇人の寺子（生徒）がおり、男女とも七歳か八歳で入学し、四年か五年で終了した。

同時代、武士階級はもとより庶民の就学率、識字率はともに世界一であった。義務教育でない寺小屋に自発的に学ぶ子供たちの就学率は全国的に五〇パーセントを超え、江戸に限定すれば八〇パーセントであった。ちなみに、当時のイギリスの大工業都市での就学率はわずかに二〇パーセントであったという。

江戸時代、一般庶民の道徳観や職業倫理を育むうえで大きな役割を果たした代表的な人物は、宗教家の鈴木正三と思想家の石田梅岩である。

江戸初期、徳川家の旗本から僧となった鈴木正三は、「世法即仏法」との考えのもと、それぞれの職分に真剣に取り組むことがそのまま信仰の実践であると説き、職業に貴賤はないとし、万民に通用する仏教的な職業倫理を世界で初めて展開した。ほぼ同時代のジャン・カルヴァンは資本主義の職業倫理をプロテスタントの側から説いたわけだが、人間の努力や修行と関係なく救済は神が決めるという予定説で、そこに限界があった。

十八世紀前半の八代將軍吉宗の時代に活躍し、「心学」（＝石門心学）の開祖となった石田梅岩は、鈴木正三以上に日本人の倫理の向上に寄与した思想家・倫理学者である。江戸時代中期から後期にかけて、石田の心学は平易な実践道徳として大いに一般大衆を感化し、別名「道徳教」とも呼ばれた。明治の「文明開化」時代、石門心学は一時下火となったが、その命脈は絶えることなく今日に及び、近年再評価されている。石門心学は、神道、仏教、儒教の教えを援用し、心を磨き、「正直・儉約・勤勉」の『三徳』を実践せよ、と説く。

故渡部昇一氏は、こうした石田心学を世界宗教史上特筆すべきものだと高く評価した。「石田心学は、まず人間には心があつて、その心を磨くのにいい教えというのが、仏教にもあれば神道にもあるし儒教にもある、というのである。これは宗教の相対化というものである。諸宗教を相対化することによって倫理の向上を実践したという意味で、世界宗教史上に無比の地位を占めるといえよう。これも『心』というものを勾玉と表象した日本人独特の感性が生んだものである」（渡部昇一『世界一の都市 江戸の繁栄』ワック）と。

## 9、パクス・トクガワナーのパラドックス

これまで見てきたように近世日本は“小日本”どころか紛れもなく超大国であった。

慶長五年（一六〇〇）、関が原の戦いに勝利した徳川家康は、慶長八年、征夷大將軍となり江戸に幕府を開いた。家康は、元和元年（一六一五）、大阪夏の陣で豊臣氏を滅ぼしたあと武家諸法度・禁中並公家諸法度を制定、文字どおり日本の支配者となった。三代將軍家光の時代には参勤交代制度を確立、徳川幕藩体制は盤石となった。家光治下で勃発した島原の乱を契機にキリシタン禁止政策が強化され檀家制度が始まるとともにオランダと清以

外の外国船の入港が禁じられ、一六四一年、オランダ商館が平戸から長崎の出島に移された。幕府はオランダ商館長に「阿蘭陀風説書」を、長崎の唐人屋敷には「唐船風説書」の提出を義務づけ、貿易と海外情報を独占した。こうした体制がいわゆる“鎖国”である。

幕府直轄の長崎だけでなく、薩摩口（対琉球）、対馬口（対朝鮮）、松前口（対蝦夷地・千島・樺太）と四つの窓口が世界に向かって開かれてはいたが、いずれも幕府を利する閉鎖的な体制であった。

幕府は度々「大船建造禁止令」を発していたため、江戸時代後期になり日本沿岸に西欧諸国の軍船が出没しても幕府も各藩も対抗手段がなかった。近世初頭、世界一の鉄砲大国であったにもかかわらず、「諸国鉄砲改」などによって全国規模の銃規制がなされ、火器の製造・研究は封印された。もともと、害獣駆除用の火縄銃は「農具」として認められ、全体的に武士たちよりも農民たちの方がより多くの銃を所有していた。しかし、農民が団体交渉ともいうべき農民一揆を起こしても、決して鉄砲は使わなかった。領主側も鉄砲の使用を自制した。双方に暗黙の“鉄砲相互不使用原則”が生きていたのだ。

アメリカの英米文学者ノエル・ペリンに『鉄砲をすてた日本人 日本史に学ぶ軍縮』（川勝平太訳、紀伊國屋書店）という著作がある。一九八四年発刊の本書は、ライシャワー元駐日大使も推奨した話題の書ではあったが、鼻疽の引き倒しの観は否めないものだった。

“軍縮”は徳川幕府の支配体制維持のために各藩に強いたものに過ぎず、結局、一国平和主義の罠に陥り、幕末に至って西欧列強の植民地化の危険に身を晒すことになる。「徳川の平和」は、GHQに押し付けられた現行憲法下で一億総平和教信者となった戦後日本の思考停止状態と酷似している。幕府をアメリカに、藩を日本に、鉄砲を核兵器に、西欧列強を核を持つ反日敵性国家に置き換えてみるとよく理解できる。

ところで、西欧列強に対抗できる強力な統一国家を創ろうする薩長中心の倒幕勢力と旧幕府側勢力が戦った戊辰戦争は、それぞれの背後で虎視眈々としていた英仏の介入を拒み、最小の犠牲で新生国民国家を生み出した。鳥羽伏見の戦いから西南戦争に至るまで、明治維新に関わる犠牲は三万人弱であった。それに対してフランスでは、ルイ王朝のアンシャンレジームを打倒したフランス革命とそれに続くナポレオン戦争で近代国民国家を形成するまでになんと四〇〇万人もの犠牲者を出し、その内のおよそ半数はフランス人であった。天皇を戴く明治政府は、版籍奉還、廢藩置県、四民平等、学制発布、徴兵令交付と矢継ぎ早に近代国民国家への改革を進めるが、これらは特権階級であった武士階級の自己犠牲のうえに成されたもので、西欧ではこうした自発的な自己犠牲は考えられない。

明治時代、日本は猛スピードで殖産興業、富国強兵策を進め、日清・日露戦争に勝利してまたたく間に国際政治を左右する列強の一角を占めるが、こうした“奇跡”をもたらしたものは、すべて江戸時代の蓄積があったからである。

とはいえ、世界の近世史上に類例のない、“侵さず・侵されぬ”二六〇年にわたる「徳川の平和」（Ⅱパクス・トクガワナ）は自律と円熟の文化文明を生み出したが、一方で、亡国にも繋がりがかねない一国平和主義の陥穽に陥ってしまったという歴史のパラドックスには留意せねばならない。